I-22

フランク O.ゲーリーの住宅作品における形態操作の研究
—住宅作品を中心とした分析とシングルルームについて—
A STUDY OF FRANK O. GEHRY'S HOUSES IN MANIPULATION OF FORMS
Mainly analyzing houses and the single room

○田中僚[1]，　山中新太郎[2]
*Ryo Tanaka[1], Shintaro Yamanaka[2]

１．研究の背景と目的

プリツカー賞などの様々な受賞歴を持ち、現代建築に多大な影響を与えてきた建築家、フランク 0. ゲーリーは、その独特な設計手法を用いて、様々な評価や討論を生み出してきた人物である。また、ゲーリーと言えば、ビルバオ・グッゲンハイム美術館やヴィトラ・デザインミュージアムなどに代表される、今までにない未知の作品性と有機的と見られる設計から、多くの建築家たちの注目の的となった。

そのゲーリーの活動に非常に注目し、多くのエッセイや作品集の作成に取り組んだミルドレッド・フリードマンは、「同世代の誰をも凌ぐ革新的な建築家である。20 世紀の建築が到達した美学や技術—その限界を超えていくまなざしが彼にはある。」と述べている。

fig.1 ビルバオ・グッゲンハイム美術館

fig.2 ヴィトラ・デザインミュージアム

このように、ゲーリーがその作品性から多くの批判を買うと同時に、現代建築における最も重要な建築家のひとりであり、彼の設計概念や手法などを正確に理解することは、これからの建築にとって非常に重要であることが分かる。

ゲーリーが建築家としての活動を開始して間もない頃、彼は多くの住宅作品を手がけており、その形態操作は、近年のものとは対称的に、シンプルで落ち着きのあるものとなっている。しかしながら、それらの住宅作品に対する評価はほとんどなく、一連の作品を系譜的に考察した評価はされておらず、断片的な考察にとどまっている。

本研究目的は、建築家フランク 0. ゲーリーの有機的形態操作に入る以前の住宅作品に焦点を置き、初期作品から順に連続的かつ系譜としての研究を行うことで、彼の有機的形態以前の形態操作の概念や操作の思考を解明していくことである。

２．研究対象と方法

研究対象としては、ゲーリーの建築作品の中でも住宅作品に焦点を置き、特に批評家たちのエッセイやゲーリーの作品集において登場頻度が高く、重要であるとされる 16 の住宅作品について研究を行う。作品はゲーリーが建築家として活動し始めた 1954 年のスティーブスハウスから 1989 年のシュナ—ベルハウスまでの、実現した計画と実現していないアンビルドの計画を含む作品を本研究対象とする。

前述した住宅作品 16 作品を図面やビジュアル、などの情報から読み込み、評論やエッセイなどの資料文章の翻訳を行い、作品同士の関連性や創作背景を探り、作品を系譜的に見た考察を行う。

またその際に、各作品におけるシングルルームという概念がどの程度考慮されているかという点を軸に考察を行う。

３．シングルルームについて

シングルルームとは、1950 年頃に行われたフィリップ・ジョンソンによるレクチャーで述べられたとされる概念のことである。それは建物における室のひとつひとつが持つ機能や用途には、それぞれに違いがあるように、その形状や材質、空間性にもそれぞれの性格が反映されるべきだということを述べている。シングルルーム、つまり、室 1 室がその用途や機能に合った計画がなされているということが、建築において重要であるということであると考えられる。

ゲーリー自らが語ったフィリップ・ジョンソンのシングルルームについての概念が、ゲーリーの住宅作品の生成に大きく関与していたことは間違いなく事実である。このことから、ゲーリーの考えるシングルルームの概念が、一連の住宅作品のある時期において現れ、作品生成の過程で試行錯誤され、その結果として得た

１：日本理工・学部・建築　２：日大理工・教員・建築

手法が、今日のゲーリーのモダニストとしての手法の根底を成しているのではないだろうか。

４．時系列的分析

ゲーリーの作品にはフィリップ・ジョンソンの述べたシングルルームという概念が関与しており、その概念に基づく操作は時代に伴って大きく変化している。そこで、ゲーリーの作品を年代ごとに分けて考察した結果、その時代は大まかに 5 つにわけられる（fig.5 参照）。

5 つの時代に分類した結果、ゲーリーの考えるシングルルームの概念が建物に反映され始めたのは、1972 年のロン・ディヴィス スタジオ&レジデンスからであるということが考えられる。また、その概念には、材質の試行により得た技術、配置の試行によって得た手法などがどんどん取り入れられていき、最後の時代においてその概念および手法が完全なものとなったことがわかる。

fig.3 ロンディヴィススタジオ＆レジデンス

1989 年のシュナ―ベルハウス以降、住宅を建てていないという点も踏まえ、ゲーリーはその有機的形態操作の基礎を住宅において確立したと考えられる。

fig.4 シュナ―ベルハウス

<フランク O.ゲーリー主要住宅作品年表>

1959 年　スティーブスハウス → ゲーリーの最初期にあたる作品
1964 年　クラインハウス
1965 年　ダンツィガーハウス → 線から面を意識した操作へ

<最初期・単純幾何学期>
ゲーリーが尊敬していたフランク・ロイド・ライト、ハーウェル・ハリスらの後追いの操作を行っていた時期
単純幾何学の線から面への操作を行っていた

1972 年　ロン・ディヴィススタジオ&レジデンス → 形態を歪め始める
モチーフの操作を得る
初めてシングルルームの概念が見え始める

1978 年　ガンサーハウス
ワグナーハウス
ファミリアンハウス
ゲーリーレジデンス
実現しなかった 3 部作品
ゲーリーレジデンス → この期間で試してきたことすべてを活かした集大成の作品
包むような操作を得る
コラージュ的操作を得る
部分として設計したものを集約した

<形態・材質試行確立期>
アーティストとの交流が増え、彼らの自由な創造姿勢に感化され、自信を持って、己の抑えていた考えを設計に表し始めた時期
その影響か他の年と比べて多くの計画を行っている
具体的な操作例として、モチーフ、コラージュ、包むような操作に目覚め始め、各計画において実践している
フィリップ・ジョンソンのシングルルームの概念が見え隠れし始めた時期でもある
自邸は今日でも代表作として取り上げられる一つの手法的集大成となった作品である

1979 年　スピラーハウス → 実現に至らなかったファミリアンハウスや自邸のアイディアを用いた設計を行う
分散の概念が表れ始める

1981 年　ベンソンハウス
インディアナ・アベニュー・ハウシーズ

<分散配置期>
建物の要素を分離し始め、複数棟による構成をとり始めた時期
自身の考えるシングルルームの追求の過程とみられる操作が行われた

スミスハウス → ゲーリー初となる自身の作品の増築計画（スティーブスハウス）
初期の己の作品とは対照的な操作を見せるが未実行に終わる

1982 年　ウォスクベントハウス → シングルルームの概念に対するゲーリーの解答として群的な配置を見せる
分散的な配置から集約化した配置へと変化する

1983 年　ウィントン・ゲストハウス → ウォスクの計画に続き部分の集約化がなされた配置を見せる
コラージュ的操作を用いる

ノートンハウス → 周辺都市環境を部分に反映した計画が見られ、上に同じくそれを集約化した配置を見せる
モチーフ的操作を用いる

<手法適応・群集約化期>
これまでに培ってきた技術や手法を活かし計画を行っていた時期、また分散配置で見られた部分を集約化し始めた時期
コラージュやモチーフの操作を引き続き用いながらも、それを安定して計画に取り込み、盤石なものとしていった
シングルルームに対する自身の解答として、要素・部分の分散配置を経て、それらを集約化するといった操作へと発展させる
そのため異なる形状・材質の要素がぶつかり合ったような作品が多く、彫刻的な印象を与える
周辺環境に合わせた設計は今までされてきたが、それらを取り込み、要素として反映させたのはゲーリー自邸以来初めてとなるノートンハウスが計画された

1984 年　サーマイ＝ピーターソンハウス → どの作品にも比べて完成度が高いとされる作品
素材感や群的配置に加えて水という新たな装飾概念を得た

1989 年　シュナーベルハウス → ゲーリーの手掛けた最後の住宅とされる作品
これまでのすべての手法を用いており、シングルルームの追求と共に、モダニストとしての操作が完成された

<傑作・集大成期>
これまでの技術や手法を余すことなく用いて、傑作と呼べる住宅をつくり上げた時期
その素材感や群的配置にはさらに磨きがかかり、非常に完成度の高い仕上がりになっている
シュナーベルハウスにおいてすべてを出し切り、ゲーリーのシングルルームに対する答えが明確になり、モダニストとしての操作を身に着け節目を迎えたと同時に、住宅作品の制作に終わりを告げた

fig.5 主要住宅作品年表（系譜的考察と時代区分）

５．結論

建築家フランク O.ゲーリーは、フィリップ・ジョンソンの「シングルルームこそが世界で最高の建築である」というレクチャーに共感し、それを自分の設計に落とし込んでいった結果、コラージュやモチーフといった操作を経由し、室群の分散による内外部を含めた空間づくりと、室の性格を考慮し、再構築し、それらを集約化した全体構成による、敷地を最大限に使った計画手法へと発展した。これこそが、ゲーリーの解釈したシングルルームの概念であり、今日の有機的形態操作の根幹を成す、ゲーリーの思考の一部なのであるということがわかった。

６．参考文献

[1]「OLD AND NEW : Gehry House」，FRANK GEHRY THE HOUSES，p59~p75，2009
[2] GA ARCHITECT 10 Frank O. Gehry,1993
[3] Frank Gehry Buildings and Projects,1985
[4]フランク・O・ゲーリー アーキテクチュア＋プロセス,2008